

## 題目：動物表象で読む日本文学史の中の「蛙」

第16回ワンアジア財団国際講座は、中国文化大学の齋藤正志副教授が担当した。齋藤副教授は、「文学、芸術、哲学」などから「現代的なメディア空間」と「ポップ・カルチャーに至るまで」の「多種多様な文化現象」を「表象 (representation)」と看做し、その「分析という観点」から「批評理論に立脚した学術的アプローチ」を表象文化論と定義し、「動物表象論 (critical animal studies) は、その一部だと述べて、「動物と人間の共生・共感関係を見直し」て「一方的に人間の視点から動物」を貶める「傾向にあった世界観を批判的に検討」するという沼野充義 (2018) を紹介した。この方法は、様々な分野で動物と人間の関係を論じる研究方法であり、欧米や日韓などの文化表象として既に著作も公表されていると述べたが、先行研究で言及されることのない身近な小動物の中から「蛙」を取り上げた。

蛙は古代中国遺跡から月の中に住む動物として描かれた帛画や鏡などが出土していて、鏡の場合は他の動植物も刻まれ、それが日本にも輸入されていることを述べた。その上で、日本では蛙は弱者というばかりではなく、むしろ古代では稲作文化を守る神または神の使者として待遇されていたことを語り、そうした活躍は現代小説まで及んでいると述べた。

具体的には、「蛙」に「かえる」という俗語と「かわず」という歌語とがあり、古代の辞書では5種類の蛙が立項されており、古代中国古墳では太陽の鳥に対する月の蛙として描かれていたという。最初に登場する『古事記』の神話や伝説の中での活躍が紹介され、『古今集』の序文では木々の花とともに鳴く鶯に対して、水中で鳴く蛙が登場し、『後撰集』などの勅撰集や『伊勢物語』などでも田の水中で鳴く蛙が和歌の素材として使われている。

また、女性文学にも蛙は使われており、特に妾妻の嫉妬話で知られる『蜻蛉日記』では夫によって蛙に比喻された女性筆者自身が自虐的に和歌を詠んでいる。

中世になると『鳥獣人物戯画』の中で兔や猿とともに蛙が登場し、擬人化の手法で様々な場面を形成し、最後に蛇の出現で擬人化された楽園は崩壊してしまうが、その一方で蝦蟇 (ガマガエル) が数千匹出現して敵味方に分かれ争って惨殺し合ったので、それを止めさせようとして蛇を場に投入したが、蛙たちは平和な絵巻の世界とは異なり、全く恐れることなく、蛇も退散してしまったという説話も語られてい

る（『古今著聞集』）。

近世には松尾芭蕉の俳諧連歌に「古池や蛙飛びこむ水の音」があり、『古今集』以来の「鳴く蛙」の聴覚印象から転じて、全く異なる「飛ぶ蛙」による水音という聴覚印象を表現している点が俳諧美と言われている。

このように和歌や連歌、絵巻などの平和な蛙に対して、神話や伝説、説話などの戦闘的な蛙が併存している日本文学だが、その締め括りとして挙げるべき作品が村上春樹の「かえるくん、東京を救う」である。この短篇は1995年1月の阪神・淡路大震災と3月の東京での地下鉄サリン事件との間に起きた様々な出来事を語った作品集『神の子どもたちはみな踊る』の最後から2篇目に位置するが、もともと文芸誌『新潮』の連作「地震のあとで」の最後の1篇であった。冒頭で人間と同じように話す蛙が登場し、東京の大地震から救うために蚯蚓の怪物と戦うという荒唐無稽な話だが、この戦いは「想像力の中で」のものであり、蛙は主人公の協力の下で地震を阻止することができたものの、完全な勝利には至らず、最後は（おそらく）死んでしまった。この話は伝統的詩歌の平和な世界観ではなく、伝説的説話の血腥い世界観を背景としているが、蛙が蚯蚓に完勝できなかったために地震の代わりに地下鉄テロが起きたことを暗示している。とはいえ、人間から貶められる傾向のあった動物の中でも小さな蛙（尤も、村上作品では長身の蛙）は、平安時代には男性から貶められた女性の比喩になっているものの、古代の知識と中世の暴力を経て、現代で死を遂げた悲劇のヒーローとして表象されたのである。したがって、人間は小動物といえども共存していくべきだ、と齋藤副教授は講義を締め括ったのである。